慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J.S.ミルにおける高級快楽の源泉について
Sub Title	The source of John Stuart Mill's higher pleasures
Author	水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2010
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.3, (2010.) ,p.69- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20100000-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J.S.ミルにおける高級快楽の源泉について

水 野 俊 誠

はじめに

ミルは高級快楽と低級快楽の区別を功利主義の枠組みのなかに持ち込んだ。彼のいう高級快楽とは精神的能力の使用がもたらすものであるとブリンク（David Brink）、ソーサ（Ernest Sosa）、エドワーズ（Rem Edwards）、フェルドマン（Fred Feldman）ら多くの論者が解釈している[1]。しかしこの解釈はミルが言おうとした事柄を表面的にしかとらえていない。そこで、高級快楽とは観念がもたらすものであるという解釈、および高級快楽とは精神的能力を発達させた人々が持ちたいと望むものであるという解釈を援用して、精神的能力のどのような使用が高級快楽をもたらすとミルが考えていたのかを明らかにすることを試みたい。結論を先取りしていえば、ミルのいう高級快楽とは、典型的には、観念の世界を探求するという、発達した精神的能力の使用がもたらすものであると論じるつもりである。

1　精神的能力

高級快楽とは、知性をはじめとする精神的能力の使用がもたらす快楽であるという解釈は、ブリンク、ソーサ、エドワーズ、フェルドマンらによって提示されている。この解釈を支持するミルのテキストとしてまずあげられるのは、以下のものである。

「こういうしだいだから、経験者の感情と判断が、高次能力（higher faculties）から生じた快楽のほうが高次能力から切り離された動物本性が感じうる快楽よりも、強度の問題はさておき、種類の点で（*in kind*）望ましいと宣告するとき、経験者の感情や判断は、この問題に関して前の場合と同じように尊重される資格がある」（CW10, 213）。[2]

このようにミルは、高次能力の使用がもたらす快楽が、高次能力から切り離された動物本性が感じうる快楽より高い価値を持つと述べている。つまり高級快楽とは高次能力がもたらすものであり、低級快楽とは動物本性が感じうる快楽であるとされている。それでは、ミルのいう高次能力とはどのようなものだろうか。

「エピクロス派の生活を獣の生活になぞらえることが侮辱と感じられるのは、まさに、獣の生活が人間の幸福の諸概念を満たさないからである。人間は、動物的欲求をこえる高い能力を持つ（Human beings have faculties more elevated than the animal appetites, ……）。そして、いちどその能力を意識すれば、それらを満足を含まないものを幸福とは見なさなくなる。……けれども、エピクロス派の人生観として知られているもので、知性、感情、想像力および道徳感情の快楽に、単なる感覚の快楽をはるかに上回る快楽としての価値を割り当てないものはない（There is no known Epicurean theory of life which does not assign to the pleasures of intellect, of the feelings and imagination, and of moral sentiments, a much higher value as pleasure than to those of mere sensation.）。もっとも、功利主義の著述家が一般に、精神的快楽を肉体的快楽より上位（the superiority of mental over bodily pleasures）に置いたのは、主として恒久性、安全、コストがかからないことなどの点―つまり、内的本性よりむしろ外在的な利点―で精神的快楽のほうが優れているからであったことは認めなければならない」（CW10, 210-1）。

動物的欲求と対比されている人間の高い能力とは、先ほど引用した『功利主義論』2 章第 8 節における高次能力と同じものであると考えられる。というのは、高次能力がもたらす快楽は、高い能力がもたらす快楽と同じように、動物でも感じる感覚の快楽と対比されているからである。そしてミルはこの高い能力がもたらす快楽として、知性、感情、想像力、道徳感情の快楽をあげている。したがってミルのいう高次能力とは、知性、感情、想像力、道徳感情などの精神的能力である[3]。

『自由論』の以下の一節も、人間の精神的能力としてミルがどのようなものを念頭に置いていたかを知る手掛かりになる。

> 「知覚、判断、識別感情、精神的活動、道徳的選好さえも含めた人間の能力は、選択する際にのみ発揮される。何事であれそうするのが習慣だからといってする人は、何の選択もしない。彼は最善のものを見分けたり望んだりする練習ができない。筋力と同じように精神的道徳的な（mental and moral）力も、使われることによってのみ向上する」（CW18, 262）。

ミルは、精神的道徳的な力として、知覚、判断、識別感情、精神的活動、道徳的選好をあげている。これらの力は、高次能力に該当するものと考えられる。また、今引用した箇所のすぐ後でミルは次のように述べている。

> 「自分自身で［人生の］計画を選ぶ人は、彼のすべての能力を使用する。彼は、見る観察力、予測する推理力と判断力、決定に必要な材料を集める活動力、決定する識別力を使わなければならず、いったん決定を下したら、熟慮のうえで自分が行った決定を守る確固とした意志（firmness）と自制心を使わなければならない。そして、彼はこれらの能力を、自分の行為のうち、自分自身の判断と感情に基づいて決定す

る部分の大きさに比例して必要とし、また行使するのである」（CW18, 262-3）。

人生の計画を選択するために必要な能力としてミルがあげているのは、観察力、推理力、判断力、活動力、識別力、確固とした意志と自制心などである。これらの能力も、すぐ前の引用文であげられていたいくつかの能力と同じように、高次能力に該当するものと考えられる。

しかし、高級快楽とは精神的能力の使用がもたらす快楽であるという解釈は、ミルがいおうとしたことを表面的にしかとらえていないように思われる。というのは、この解釈によれば、それ以上の目的を持たずに数の計算を繰り返すことがもたらす快楽や、テレビゲームをすることがもたらす快楽は高級なものに該当することになるが、この結果がミルの真意に適っているかどうかは疑わしいからである。

それでは、精神的能力の使用がもたらす快楽ということでミルは何を言おうとしたのだろうか。この問いに答えるための手掛かりになるのは、ミルのいう高級快楽とは観念がもたらすものであるという解釈、およびミルのいう高級快楽とは、発達した精神的能力を持つ人々が享受したいと望むものであるという解釈である。以下、これらの解釈について順に見ていく。

2　観念

精神的快楽あるいは高級快楽とは観念がもたらすものであり、肉体的快楽あるいは低級快楽とは感覚がもたらすものであるとフィーギン（Susan Feagin）は述べている。観念がもたらす精神的快楽あるいは高級快楽は、身体的刺激の現前に依存せず、知性や想像力のような精神的能力の使用を必要とするとされる。これに対して感覚がもたらす肉体的快楽あるいは低級快楽は、視覚、聴覚、触覚のような感官への刺激の現前に依存し

ているとされる[4]。

それでは、ミルのいう観念、感覚とは何だろうか。まず観念についてミルは次のように述べている。

> 「第 1 に、どのような原因によってであれ、何らかの意識状態が我々のうちに喚起されたときにはいつでも、劣った程度の同じ意識状態、すなわちもとの意識状態に似ているが強度の劣った意識状態が、はじめに喚起されたような何らかの原因の現前なしに、我々のうちに再生されることができる。このように我々は、いちどある対象を見たりそれに触れたりしたとすれば、その対象が我々の視覚や触覚に不在であっても、後でそれを考えることができる。我々がある出来事を喜んだり悲しんだりしたとすれば、幸福な本性または不幸な本性をもつ新しい出来事が何も起こらなくても、我々の過去の喜びや悲しみを考えたり思い出したりすることができる。ある詩人は、遊惰の城、ユナ、ハムレットのような想像上の対象の心象を組み立てたとき、新しい知的結合の行為を一切行わなくても、彼が想像した観念的対象を後で考えることができる。この法則は、すべての心的印象（*impression*）はその観念（*idea*）を持つとヒューム（David Hume）の言葉でいうことによって表現される。
>
> 第 2 に、これらの観念あるいは二次的な心理状態は、我々の印象によって、または他の観念によって、観念連合の法則と呼ばれるある法則に従って喚起される」（CW8, 852）。

ミルのいう観念とは、はじめに何らかの意識状態すなわち印象が喚起された後で再生できるようになる、もとの意識状態に似ているが強度の劣った意識状態である。たとえば、私が一匹の猫を見てそれに触れた後には、その猫が目の前にいなくても、その猫の観念を持つことができる。また、旧友との再会が私に喜びをもたらしたとすれば、その友人が目の前にいない

ときでも、私はその再会がもたらした喜びの観念を喚起することができる。さらに、シェークスピア（William Shakespeare）はハムレットをいちど創造した後でなら、その創造をもう一度はじめからやり直さなくても、ハムレットの観念を容易に喚起することができる。このようにミルのいう観念とは、はじめに喚起されたさまざまな意識状態（即ち印象）のコピーなのである。

一方、感覚についてミルは次のように述べている。

> 「ここで、我々の研究のどこでもそうするように、我々は、心自体の本性に関するすべての思弁を放棄して、心の法則が、心理現象の法則、感覚を持つ（sentient）存在者のさまざまな感情すなわち意識の状態の法則を意味すると考えておく。我々が一貫して従ってきた分類によれば、これらの感情は、思考、情緒、意志、感覚からなる」（CW8, 849）。

ミルは感覚を持つ存在者のさまざまな感情をその意識状態と言い換えている。そして感情は、思考、情緒、意志、感覚からなると述べている。このように、ミルのいう感覚とは、一種の感情すなわち意識の状態のことである。さらに同じ節のなかでミルは次のように述べている。

> 「感覚とよばれる心の状態に関して、これらが直接先行するものとして身体の状態があることにすべての人が同意している。すべての感覚の近接した原因は、神経系と呼ばれる我々の組織の一部の状態である。この状態がある外的対象の作用から生じるのか、神経組織自体の病的な状態から生じるのかにかかわらずそうである」（CW8, 850）。

感覚の直接の原因は神経系の興奮である。この興奮は、神経自体の病的な状態がもたらす場合も、外的対象の作用がもたらす場合もあるとされる。

このようにミルのいう感覚とは、神経の興奮が直接の原因となって生じた意識の状態である。しかし、ミルは感覚をここで明確に定義しているわけではない。実際、思考、情緒、意志の直接の原因が神経の興奮である可能性をミルは否定していない。そこで、ミルのいう感覚とは何かを理解する手掛かりになるのは、ミルが注釈を施した父ジェームズ・ミル（James Mill）の『人間精神の現象分析』における父ミルによる次のような叙述である。

「感覚あるいは感覚現象という言葉を用いるとき、我々は五感――嗅覚、味覚、聴覚、触覚、視覚――によって我々が持つ感情を、ふつうは意味する」[5]。

父ミルは感覚とは五感がもたらす感情であると述べている。子ミルは、批判的な注釈を付けた箇所以外では、父ミル『人間精神の現象分析』における心理学を踏襲している。そして子ミルは、いま引用した箇所には注釈を付けていない。そこで子ミルは、父ミルによる感情のこの定義を受け入れていたと考えられる。

観念と感覚に関するいま見た子ミルの見解を考慮に入れて、フィーギンの解釈を定式化しなおすと次のようになる。すなわち、精神的快楽あるいは高級快楽とは印象に対して二次的な意識の状態である観念がもたらすものであり、肉体的快楽あるいは低級快楽とは、五感によって我々が持つ意識状態である感覚がもたらすものである。

フィーギンによるこの解釈を支持するテキストとしてまずあげられるのは、ジェームズ・ミルの著書『人間精神の現象分析』に子ミルが付けた以下の注釈である。

「音楽によって与えられた快楽の非常に多くのものが音楽の表現（expression）の効果、つまり音と連結した連合（associations）の効果

であることを、たいていの人は認めるであろう。しかし、直接肉体的で感覚的な快楽の要素もあることは、疑うことができない。第 1 に、他の単純な音質が不快であるように、ある単純な音質は肉体的に快適である。次に、楽しい音の協和音やハーモニーが純粋に肉体的な享楽にもう一つの要素を付け加える。第 3 に、メロディや旋律を構成するある種の音の連続は、単なる感覚にとって楽しいものであるように、私には思われる。そうした連合した観念（idea）と感情とは、これらの快楽と内密に混合されるが、批評できる耳によりある範囲で識別できる。異なる作曲家について、一人（ベートーヴェン）は表現においてきわめて優れているが、（モーツァルトのような）もう一人は肉体的部分においてきわめて優れているということも可能である」（CW31, 222）。

音楽がもたらす快楽には、感覚的なものと、音楽の表現の効果によるもの、つまり音と連合した観念によるものとがある。感覚的な快楽は低級快楽であり、観念がもたらす快楽は高級快楽である。この 2 種類の快楽は、ある範囲で識別できるとミルは述べている。たとえばベートーヴェン（Lutwig von Beethoven）の作品は、主として表現ないし観念による快楽をもたらすのに対して、モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart）の作品は、主として感覚的肉体的な快楽をもたらすとされる。このようにミルの考え方によれば、音楽がもたらす高級快楽は観念がもたらすものであるのに対して、低級快楽は感覚がもたらすものであるとされる。

つぎに、フィーギンの解釈を支持する第 2 の証拠は『自叙伝』の以下の箇所である。

「従って、分析の習慣は、思慮と明察にとっては有利であるが、情念と徳の両方の根に常に巣食う害虫である（と私は考えた）。その習慣は、とりわけすべてのすべての欲求と快楽を恐ろしいほど損なう。欲

求と快楽は、私が信奉していた理論によれば、純粋に肉体的、生理的なもの以外はすべて観念連合の結果なのであるが（……all desires and all pleasures, which are the effects of association, that is, according to the theory I held, all except the purely physical and organic;）、純粋に肉体的、生理的な欲求や快楽が人生を望ましいものにするためにはまったく不十分だということについて、私は、誰よりも強い確信を抱いていた」（CW1, 143）。

純粋に肉体的、生理的な快楽は、人生を望ましいものにするためにはまったく不十分なものであるとミルは述べている。このような快楽を、ミルは『功利主義論』のなかで低級快楽と呼んでいた。これに対して、何らかの精神的快楽を含むあらゆる快楽は、観念連合の結果であるとミルは述べている。

すでに見たように観念連合の法則についてミルは『論理学体系』において次のように述べていた。「これらの観念、即ち二次的な心理状態は、我々の印象または他の観念によって、連合法則と呼ばれるある法則に従って喚起される」（CW8, 852）。観念連合の法則とは、観念が印象または他の観念からどのように生じてくるのかを規定するものである。したがって、何らかの精神的快楽を含むあらゆる快楽が観念連合の結果であるとするならば、それらの快楽は、観念連合の法則に従って生じた観念の結果である。このようにミルのいう高級快楽とは、観念がもたらすものである。

高級快楽とは観念がもたらすものであり、低級快楽とは感覚がもたらすものであるというフィーギンの解釈を支持するように見える第 3 の証拠は、『人間精神の現象分析』注釈のなかで、美に関するラスキン（John Ruskin）の考え方についてミルが述べた以下の箇所である。

「彼［ラスキン］が明らかにした結果は、美しいものの情緒を与えるものはすべて、ある高尚な観念または愛らしい観念のあれこれを表明

し象徴しており、こうした観念は、彼の理解では宇宙のうちに具体化されていて、宇宙の創造者のさまざまな完全性に対応している、というものである。彼は、こうした観念が無限、統一、休息（Repose）、均整、純粋、中庸、諸目的への適応である、と主張している。私の判断によれば、彼はかなりの程度自分の言い分を証明するのに成功している」（CW31, 224）。

美しいものの情緒をもたらすすべての物事は、無限、統一、休息、均整、純粋、中庸、目的への適応などの観念（ideas）を表現しており、これらの観念は、宇宙の創造者のさまざまな完全性に対応している。つまり美の感情をもたらすのは、無限をはじめとするいくつかの観念であるとミルは述べている。

ところで、美の感情あるいは美しいものの情緒と審美的快楽との関係についてミルはどのように考えていたのだろうか。

「すべての感情のうちで、獲得された快楽と苦痛、とくに快楽は、最も複合した感情である。それは我々の本性と過去の生活全体から結果として生じてくるものであり、従ってほとんどどのような他の精神現象よりも、はるかに多数で種類の多い連合を含んでいる。しかも、さまざまな快楽のうち、審美的（aesthetic）快楽は、明らかに最も複合的なものである。異なる人々が同じ対象を観照することで与えられる美と荘厳の感情（the feelings of beauty and sublimity）は、同じ対象について異なる人々の快い連合がよくそうであるように、明白に異なっていることに注意したほうがよいし、連合理論がかなり確認していることでもある」（CW31, 225）。

我々の感情のなかには、快楽と苦痛が含まれている。そして生まれつきのものではなく後天的に獲得された快楽は、多数の観念と連合した複雑なも

のである。これらの快楽のなかで、審美的快楽はとくに複雑なものであるとされる。そして審美的快楽が複雑なものであるという文をパラフレーズして、異なる人が同じ対象を観照することで与えられる美と荘厳の感情（feelings）は明らかに異なっているとミルは述べている。このようにミルは、審美的快楽という言葉を美の感情という言葉とを同じ意味で用いている。

すでに見たように、美に関するラスキンの考え方について述べた箇所でミルは、無限、統一などの観念が美の感情あるいは美しいものの情緒をもたらすと述べていた。そして後続する箇所でミルは、美の感情と審美的快楽を同じ意味で用いていた。したがって、無限、統一などの観念が審美的快楽という高級快楽をもたらすとミルは考えていたといえるだろう。

ここで我々は、フィーギンの解釈に第 1 の修正を加えなければならない。フィーギンによれば、ミルのいう高級快楽とは観念がもたらすものであり、低級快楽とは感覚がもたらすものであるとされていた。しかし、今見たミルのテキストによれば、無限、統一をはじめとするいくつかの観念だけが高級快楽をもたらすとされる。このことを考慮に入れてフィーギンの解釈を修正すると次のようになる。すなわち、ミルのいう高級快楽とは無限、統一をはじめとするいくつかの観念がもたらす快楽であり、低級快楽とは感覚がもたらすものである。

さらに、ミルのいう高級快楽とは観念がもたらすものであるという解釈を支持する第 4 の証拠としてあげられるのは、先ほどの引用に後続する以下の箇所である。

> 「ラスキン氏が特定しているような観念の想起と、そのような観念と結合した偉大で興味ある対象と思想の想起とからなる意識の状態は、自然と芸術の対象によって私たちの心の中に生じた大量の快い感情の部分として、それらの想起としばしば結び付く平凡で日常的な快楽の連合より、いっそう高尚な（elevated）性格を持っており、より深く

私たちの本性を感動させるはずであることも、驚くべき事ではあり得ないように思われる」（CW31, 224-5）。

無限、統一などのラスキンが特定している観念、およびそのような観念と結合した対象や思想の想起からなる意識の状態は、快い感情を伴っている。一方、このような意識の状態とは異なる連合が、平凡で日常的な快楽をもたらす。そして無限、統一などの観念などがもたらす意識の状態は、平凡で日常的な快楽をもたらす連合より高尚な性格を持っており、我々の本性をいっそう深く感動させる。このように無限をはじめとするいくつかの観念は、平凡で日常的な観念とは異なって高級快楽をもたらすのである。続けてミルは次のように述べている。

「風の強い国では、強風に対する防壁となるように置かれた木々は、暖かさ、慰め、保護の諸観念を引き起こす。そうした観念はコールリッジによって美なるものから区別された「快適なもの」に属している。しかも、こうした快適なものは、たいてい、我々が木々を観照するさいに抱く快い感情の中に入っているが、とはいえ審美的感情に特有な特別な性格を木々に与えはしない。こうしたものの他に、適切にいって木々の美を構成している他の要素がある。そうした要素は、我々の本性の他の部分に訴え、また無意味にではなく、より高級な本性の部分と呼びなれているものに訴える。そうした要素が、想像力に向かってより強い刺激とより深い楽しさを与える理由は、要素が引き起こす観念（idea）がそれ自体、より大きな力で想像力に働きかけるからである」（CW31, 225）。

平凡で日常的な快楽をもたらす観念の例としてミルがあげているのは、防風林の観念である。風が強い国で風を防ぐために植えられた木々が喚起する暖かさ、慰め、保護の観念は、快適さの感情はもたらすが、審美的な感

情をもたらすことはないとされる。それに対して、木々の美を構成している別の要素は、無限、統一などの観念を喚起し、これらの観念は我々の本性のいっそう高級な部分に訴えて、想像力に向かってより強い刺激とより深い楽しさを与える。このようにミルの考え方によれば、暖かさ、慰め、保護などの観念が快適さという低級快楽をもたらすのに対して、無限、統一などの観念は審美的快楽という高級快楽をもたらすのである。

ここで我々はフィーギンの解釈に第 2 の修正を加えなければならない。第 1 の修正を加えたフィーギンの解釈によれば、ミルのいう高級快楽とは無限、統一をはじめとするいくつかの観念がもたらす快楽であり、低級快楽とは感覚がもたらすものであるとされた。しかし今見たように、暖かさ、慰め、保護のような観念も低級快楽をもたらすとミルは述べていた。このことを考慮に入れてフィーギンの解釈を修正すると以下のようになる。すなわち、ミルのいう高級快楽とは、無限、統一をはじめとする観念がもたらすものであり、低級快楽は、感覚、または暖かさ、慰めのようないくつかの観念がもたらすものを含む。

それではなぜ、無限、統一などのいくつかの観念がもたらす快楽は、感覚や他の観念がもたらす快楽より高級なものになるのだろうか。この問いに答えるために役立つのは、『人間精神の現象分析』注釈における以下の箇所である。

> 「(少なくとも中庸のような主に他のものへの補助となる観念を、その効果と食い違うようなものを除くことによって除去するなら)、ラスキン氏のリストに残っている諸観念は、すべて私たちにとってある価値のある属性ないし楽しい属性を示すが、経験の示すところでは、そうした属性の完璧で完全な状態の実例はない。それゆえ、そうした属性は活動的な想像力を刺激して、既知の実在を越えてずっと魅力的な、ずっと荘厳な世界へともたらす。こういうことは、いわゆる低級快楽の場合には生じない。そうした低級快楽には停止する一定の限界があ

る」（CW31, 226）。

無限、統一、安らぎ、均整、純粋、諸目的への適応などの観念は、価値のある楽しい属性を、感覚を通して経験される世界のなかでは決して与えられないほど完全な仕方でもたらす。そうすることによってこれらの観念は、我々の想像力を、現実を越えてずっと魅力的で荘厳な世界へと連れて行く。このことが、無限をはじめとするいくつかの観念がもたらす快楽を、高級なものにするのである。それに対して、感覚がもたらす快楽や暖かさ、慰め、保護のようなありふれた観念がもたらす快楽は、想像力を刺激して、現実を越えた荘厳な世界にもたらすことはない。つまりこれらの快楽は、感覚が与えるこの経験世界のなかにとどまり続ける。だから、これらの快楽は低級なものとされるのである。

このように審美的快楽と感覚的快楽は明確に区別されるとはいえ、感覚的快楽が審美的快楽に変化するケースがあることをミルは指摘している。

「もし特定の場合に、そうした低級快楽が連合によってそれ自身よりも偉大な観念（ideas）を引き起こす力を得て、想像力を刺激して、その構想をそれらの観念（ideas）の次元まで拡大するなら、その場合低級快楽は、特別に審美的なものの領域に上昇し、それ自身の本性にはない性格と質（quality）の快楽要素を付加したと感じられるのである」（CW31, 226）。

低級快楽は、無限、統一のような偉大な観念と連合して、それらの観念の次元（すなわち経験世界を越えたずっと魅力的で荘厳な世界）、審美的なものの領域に上昇する場合がある。そのような場合、もとの低級快楽は新しい性格と質の快楽要素を獲得して、審美的快楽という高級快楽に変化する。たとえば、音楽になじみがない人は、モーツァルトのいくつかの作品から快いメロディやハーモニーなどがもたらす感覚的な快楽だけを享受す

るかもしれない。しかし、音楽を鑑賞する力がついてくると、作品のなかに無限、統一、休息、均整、純粋などの観念やそれと結び付いたある思想を感じ取ることができるようになる。こうしたケースで、低級快楽は高級快楽に変化するとミルはいうのである。

本節で修正したフィーギンの解釈によれば、ミルのいう高級快楽とは、無限、統一をはじめとするいくつかの観念がもたらす快楽であり、これらの快楽が高い価値を持つのは、それらの観念が現実を越えた荘厳な世界に我々を連れて行くからであるとされた。この解釈を若干敷衍していえば、観念の世界を探求するという精神的能力の使用が高級快楽をもたらすということになるだろう。このように表現した目下の解釈は、高級快楽とは精神的能力の使用がもたらすものであるというブリンクらによる解釈をいっそう限定し深めるものである。

3　自己の発展（self-development）

ミルのいう高級快楽とは、陶冶（cultivate）された人々あるいは精神的能力を発達させた人々が享受したいと望むものであるという解釈をとる論者には、ロング（Roderick Long）、スカルプスキー（John Skorupski）、ハリス（George Harris）、アーバン（Wilbur Marshall Urban）らがいる[6]。このなかから、とくに周到に展開されているロングの解釈を取り上げて検討したい。

ミルのいう高級快楽についての解釈を提示するための準備として、ロングはまず次のように論じている。すなわち、『功利主義論』2 章においてミルが考察しているのは、たとえば詩を読む快楽やおいしいものを食べる快楽のような個々の快楽の質的な優劣ではなく、ソクラテス（Socrates）の生き方や愚か者の生き方のような、さまざまな生き方の間の質的な優劣であるとロングはいう。ロングによるこの解釈を支持する証拠としてあげられるのは以下の箇所である。

「ところで、両方の快楽を同じように熟知し、同じように評価し享受できる人々が、彼らの高次能力を行使する生き方（manner of existence）にきわめてはっきりした選好を示すことは、疑いのない事実である。獣の快楽の最大限の支給という約束と引き換えに、人間より下等な動物のどれかに変えられることに同意する人間は、ほとんどいないだろう。愚か者、のろま、悪漢のほうが自分たち以上に自分の運命に満足していると説得されたとしても、知的な人が愚か者になることに同意しないだろうし、教育のある人が無学な人に、思いやりのある良心的な人が利己的で卑怯な人になろうとは思わないだろう。こういう人たちは、愚か者たちと共通して持っているすべての欲求をまったく完全に満足させられることと引き換えに、愚か者たちより余分に持っているものを放棄しないだろう」（CW10, 211）。

両方の快楽を熟知して享受できる人々は、知性をはじめとする精神的能力を使用する生き方をはっきりと選好する。また、人間は下等動物になることに同意せず、知的な人、教育のある人、親切で良心的な人は、愚か者、のろま、悪漢、無学な人、利己的で卑怯な人になることに同意しないだろうとミルは述べている。このようにミルが比較しているのは、人間、知的な人、教育のある人、親切で良心的な人の生き方と、下等動物、愚か者、のろま、悪漢の生き方であるように見える。さらにミルは、同じ段落で次のように述べている。

「満足した豚であるより不満足な人間であるほうが良い。満足した愚か者であるより不満足なソクラテスであるほうが良い。そして愚か者や豚が異なる意見を持っているとすれば、彼らがこの問題について自分たちの側面しか知らないからに過ぎない。この比較の相手方は、両方の側面を知っている」（CW10, 212）。

ここでもミルが比較しているのは、満足した豚であることと不満足な人間であること、満足した愚か者であることと不満足なソクラテスであることである。このようにミルが比較しているのは、個々の快楽の質ではなく、さまざまな生き方がもたらす快楽の質であるとロングはいうのである。

そのうえでロングは、ミルのいう高級快楽について次のような解釈を提示している[7]。すなわち、個々の精神的快楽を含む生き方あるいは個々の精神的快楽をもたらす性格は、そうでない生き方や性格より多くの快楽をもたらす。そのため、両方の生き方あるいは性格を熟知している人々は、精神的快楽をもたらす生き方や性格のほうを選択する。（異なる生き方ないし性格の間のこの選択を、ロングは 2 階の選択と呼んでいる）。特定の生き方や性格を選択した人々は、その生き方や性格に対応する個々の快楽を選択する傾向を持つことになる。（個々の快楽の間の選択を、ロングは 1 階の選択と呼んでいる）。たとえば、ソクラテスの生き方が精神的快楽を含んでいるのに対して、愚か者の生き方は精神的快楽を含んでいない。そのため、ソクラテスの生き方は愚か者の生き方より多くの量の快楽をもたらす。それゆえ、両方の生き方を熟知する人々は、ソクラテスの生き方のほうを選択する。そして、ソクラテスの生き方を選択した人々は、敬虔さについて議論することのような当該の生き方に相応する個々の快楽を、破廉恥な行為から得られる快楽のような当該の生き方に相応しない快楽より選好する傾向を持つことになる。このように、ミルのいう高級快楽とは、当人が熟知しているさまざまな生き方あるいは性格のなかでもっとも多くの量の快楽をもたらす生き方あるいは性格をすでに選択した人々が選択するような個々の快楽である、とロングはいうのである。ロングによるこの解釈は、快楽の質を間接的にその量に還元しているという意味で、間接的還元的解釈と呼ばれる。

ロングは、この解釈を次のように擁護している[8]。まずロングは『ハミルトン卿の哲学の検討』の以下の箇所を引用する。

「第 1 に、意志が最強の動機に従うという人は、意志に対して最強の動機を意味しているのではない、言い換えれば、意志が実際に従うものに従うといおうとしているのではない。彼らは、快楽と苦痛に関する最強の動機を意味している。というのは、動機は、欲求または回避であり、欲求されるものの、我々が考える快さに比例し、あるいは回避されるものの苦しさに比例するからである」（CW9, 486）。

ミルは動機の強さが我々の欲するものの快さと我々が回避するものの苦しさに比例していると述べているので、意志がもっとも強い快楽と苦痛によって動機付けられると主張しているように見える。従って人々の選好は快楽と苦痛の量によって決まるとミルが考えていたとロングはいう。

一方、『功利主義論』においてミルは快楽の質について次のように述べていた。「快楽における質の相違という言葉で私が何を言いたいのか、あるいは、量が多いということによらずに（except its being greater in amount）、単に快楽として、一方の快楽をもう一方の快楽より価値があるものにするのは何かと尋ねられたら、可能な答は 1 つしかない。2 つの快楽のうち、両方を経験したすべての人またはほとんどすべての人が、一方の快楽を選好すべきだという道徳的責務のどのような感情とも関係なく、はっきりと選好する快楽があるとすれば、それがいっそう望ましい快楽である」（CW10, 211）。このように 2 つの異質な快楽を経験した人々の選好は快楽の量だけによって決まるのではないとミルは述べている。

今見たようにミルは、人々の選好は快楽の量によって決まるという考え方と人々の選好は快楽の量だけで決まるのではないという考え方の両方をとっているように見える。ロングは、自分の解釈をとればこれらの一見矛盾する考え方を折り合わせることができると述べて、自分の解釈を擁護している。すなわち両方の快楽を経験した人々は、より多い量の快楽をもたらす性格ないし生き方のほうを選択する。この点で彼らの選好は、快楽

の量によって決まる。そのうえで彼らが選好する質の高い個々の快楽は、より多い快楽である必要はない。このようにロングは、自分の解釈をとればミルの考え方を矛盾なく説明することができるというのである。

ロングの解釈を支持するミルのテキストとしてさらにあげられるのは、『論理学体系』の以下の箇所である。

> 「以下のことは真であると私は完全に認める。すなわち意志と行動の理想的な高貴さの陶冶は、個人にとって、当人自身の幸福や他人の幸福の個々の追求が（その理想に含まれる場合を除いて）対立発生のあらゆるケースで道を譲るべき目的であるべきだということである。しかし、何が性格のこの向上を構成するのかという問い自体は、幸福を規準として考慮することによって解決すべきだと私は主張する。性格自体が、当人にとって最も重要な目的であるべきなのは、性格のこの理想的な高貴さやそれに近いものが限りなく多く存在すれば、快楽と苦痛の不在という比較的控えめな意味と、人生を現在ほとんど普遍的にそうであるもの即ち浅薄で取るに足らないものにではなく――高度に発達した能力を持つ人々が送りたいと望めるようなものに――するといういっそう高い意味との両方において、他の何よりも人生を幸福にすると考えられるからでしかない」（CW9, 952）。

第 1 に、意志と行動の理想的な高貴さの陶冶、即ち性格の向上は、幸福の個々の追求より重要なものであるとミルは述べている。この叙述は、幸福の個々の追求に先立って、まず性格の選択が行われるというロングの解釈を支持するように見える。第 2 に、性格の陶冶が当人にとってもっとも重要である理由は、それが幸福にも役立つからであるとミルは述べている。この叙述は、異なる生き方ないし性格を熟知する人々は幸福を最大化する生き方ないし性格を選択するというロングの解釈を支持するように見える。第 3 に、高い意味での幸福とは、高度に発達した能力を持つ人が送りたい

と望むようなものであるとミルは述べている。この叙述は、高度に発達した能力を持つ人が量の観点から選択した生き方こそが幸福の本質であるというロングの解釈を支持するように見える。

ロングの解釈を支持するように見えるもう1つの証拠としてあげられるのは、『功利主義論』の以下の箇所である。

> 「そして、高貴な人（noble character）が、その高貴さゆえに高貴でない人より常に幸福であるかどうかは疑問の余地があるとしても、その人の高貴さが他人をいっそう幸福にし、世間一般がその高貴さによって計り知れない利益を得ることは疑いない。だから、功利主義は、性格の高貴さを広く陶冶することによってのみその目的を達成できるであろう。たとえ各人が他人の高貴さによって利益を受けるだけで、幸福に関する限り、自分自身の高貴さはその利益からまったく控除されるとしても、そうなのである。だが、最後に述べたようなばかげたことは、ありのままに明確に述べてしまえば、わざわざ反論するまでもなくなる」（CW10, 213-4）。

高貴な性格は、世間一般に計り知れないほどの利益をもたらすとミルは述べている。しかし今引用した最後の文でミルは、高貴な性格が当人自身にも幸福をもたらすことをミルは当然のこととみなしている。この叙述は、さまざまな性格ないし生き方を熟知する人々が、自分の幸福の量を最大化するために高貴な性格を選択するというロングの解釈を支持するように見える。

ロングの解釈の問題点は、ミルのいう快楽の質とは究極的にはその量にほかならないという彼の前提が誤っているということである。ミルが快楽の質を量とは別のものと見なしていたことは、例えば「ある種類の快楽が他の種類の快楽より望ましく価値があるという事実を認識することは、功利原理とまったく両立可能である。他のすべてのものを評価するさいに、

量のみならず質も考慮されるのに対して、快楽の評価が量のみに基づくと考えられるべきであるというのは、ばかげている」という『功利主義』2章第4節の叙述、および2章第10節の以下の叙述から明らかである。

> 「これまでに説明したような最大幸福原理に従えば、究極目的は、できるだけ苦痛を逃れ、量と質との両方の（both in point of quantity and quality）享受においてできるだけ豊かな生存ということであり、（我々が自分の利益を考えようと他の人々の利益を考えようと）他のすべての物事が望ましいのは、この究極目的への関連において、かつそれのためになのである」（CW10, 214）。

これらの箇所でミルは、快楽の質をその量に還元されるものとしてではなく、まったく別の概念として述べている[9]。

また既に見た『ハミルトン卿の哲学の検討』からのロングによる引用は、ミルのいう快楽の質とは究極的にはその量にほかならないというロングの主張を支持していない。そこでミルは「意志が最強の動機に従うという人は、快楽と苦痛に関する最強の動機を意味している。というのは、動機とは欲求または回避であり、欲求されるものの、我々が考える快さに比例し、あるいは回避されるものの苦しさに比例するからである」（CW9, 468）と述べていた。ここでミルは動機の強さが欲求されるものの快さに比例すると述べているのであって、動機の強さが欲求されるものの快さの量に比例すると述べているのではない。快さがその量のみを意味すると考えるとすれば、快楽の質を予め排除するという論点先取の誤りを犯すことになる。したがって『ハミルトン卿の哲学の検討』のこの箇所は、人々の選好が究極的には快楽の量の観点から説明されなければならないとミルが考えていたことを示していない[10]。

このように、ミルのいう快楽の質とは究極的にはその量にほかならないとする点でロングの解釈は誤っている。この誤りを持たないようにロン

グの解釈を修正すると、高級快楽とは精神的能力を発達させた人が享受したいと望む個々の快楽であるというものになる[11]。

発達した精神的能力を備えた人とは、どのような人だろうか。この点についてここでは 1 つのことを指摘するにとどめ、稿を改めて詳しく述べたい。第 1 節で引用した『自由論』3 章でミルは、「知覚、判断、識別感情、精神的活動、道徳的選好さえも含めた人間の能力は、選択する際にのみ発揮される。何事であれそうするのが習慣だからといってする人は、何の選択もしない。彼は最善のものを見分けたり望んだりする練習ができない。筋力と同じように精神的道徳的な力も、使われることによってのみ向上する」（CW18, 262）と述べていた。また、すぐ後の節で彼は「自分自身で［人生の］計画を選ぶ人は、彼のすべての能力を使用する」（CW18, 262-3）と述べていた。つまり選択することによって―とりわけ人生の計画を選択することによって―、人間に特有な能力が発達するとミルは考えている。このようにミルの考え方によれば、発達した精神的能力を備えた人とは少なくとも人生の選択に熟達した人、つまり優れた実践知を備えた人である。

いま修正したロングの解釈を支持するミルのテキストとしてまずあげあれるのは、既に引用した『論理学体系』の以下の箇所である。すなわち「性格自体が、当人にとって最も重要な目的であるべきなのは、性格のこの理想的な高貴さやそれに近いものが限りなく多く存在すれば、快楽と苦痛の不在という比較的控えめな意味と、人生を現在ほとんど普遍的にそうであるもの即ち浅薄で取るに足らないものにではなく――高度に発達した能力を持つ人々が送りたいと望めるようなものに――するといういっそう高い意味との両方において、他の何よりも人生を幸福にすると考えられるからでしかない。」（CW9, 952）。高い意味での幸福は高級快楽を本質的な要素として含むが、それらは高度に発達した能力を持つ人が享受したいと望むものである。このように、ミルのいう高級快楽とは、高度に発達した能力を持つ人々が享受したいと望む快楽である。

目下の解釈を支持する第 2 の証拠は、『功利主義論』の以下の箇所である。「このように攻撃されたとき、エピクロス派の人はいつもこう応えた。人間本性を下劣な光のなかで描き出したのは、自分たちではなく自分たちを非難する人であると。なぜなら、その非難は、人間が豚に享受できる快楽しか享受できないと想定しているからである。……エピクロス派の生活を獣の生活になぞらえることが侮辱と感じられるのは、まさに、獣の生活が人間の幸福の諸概念を満たさないからである。人間は、動物的欲求をこえる高い能力を持つ。そして、いちどその能力を意識すれば、それらを満足させないものを幸福とは見なさなくなる」。人間は、豚が享受できる快楽しか享受できないという、エピクロス派に反対する人々の想定は誤っている。つまり人間は、豚が享受できない快楽を享受することができる。そして、人間は動物的欲求をこえる高い能力を持つので、その能力を意識すれば、その能力の使用を含まないような快楽を幸福とは見なさなくなるとされる。こうミルは述べている。したがって、人間だけが享受できる快楽すなわちミルのいう高級快楽とは、知性をはじめとする精神的能力を発達させた人々が、その能力を意識する場合に享受したいと望むような快楽である。

高級快楽とは知性、想像力をはじめとする精神的能力を発達させた人々が享受したいと望むものであるという解釈は、高級快楽とは発達した精神的能力の使用がもたらすものであることを含意している。したがって目下の解釈は、高級快楽とは精神的能力の使用がもたらすものであるというブリンクらの解釈をいっそう限定し深めるものとなる。

最後に、高級快楽とは観念の世界を探求する精神的能力の使用がもたらすものであるという第 2 節で述べた解釈と、高級快楽とは発達した精神的能力の使用がもたらすものであるという本節で述べた解釈との関係について見ておく。第 2 節で述べた解釈は、精神的能力とその客体との関係に着目して高級快楽の源泉を説明するものであるのに対して、本節で述べた解釈は精神的能力とそれを持つ主体との関係に着目して高級快楽の源泉を

説明するものである。これらの 2 つの解釈は、精神的能力の使用が持つ 2 つの相補的な側面を明らかにしている。そしてこれらの解釈を結合すると、高級快楽とは、典型的には観念の世界を探求するという、発達した精神的能力の行使がもたらすものであるということになる。

おわりに

高級快楽とは精神的能力の使用がもたらすものであるというブリンクらによる解釈は、高級快楽の源泉についてミルが言おうとした事柄を表面的にしかとらえていない。そこで、高級快楽とは無限をはじめとするいくつかの観念がもたらすものであるという修正したフィーギンの解釈、および高級快楽とは精神的能力を発達させた人々が享受したいと望むものであるという修正したロングの解釈を援用して、精神的能力のどのような使用が高級快楽をもたらすとミルが考えていたのかを明らかにした。まず修正したフィーギンの解釈は、高級快楽とは観念の世界を探求するという精神的能力の使用がもたらすものであることを含意している。また修正したロングの解釈は、高級快楽とは発達した精神的能力の使用がもたらすものであることを含意している。これらの含意を結合すると、高級快楽とは、典型的には観念の世界を探求するという、発達した精神的能力の行使がもたらすものであるということになる。

残る問いは、観念の世界を探求する発達した精神能力の使用が高い価値を持つ快楽をもたらすとミルが考えたのはなぜかというものである。この問いに対する答えは別稿で示唆しておいたが[12]、さらに詳細な検討が必要である。

（みずの・としなり　慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程）

＊　ミルの著作からの引用はすべて、*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 Vols., Robson, J. M. general ed., Toronto and London, Toronto University Press and Routledge, 1965-91 から行う。本文中の引用は、略号 CW、巻数、ページ数の順に記す。なお訳出に際しては、以下の文献を適宜参照した。大関将一、小林篤郎訳『論理学体系Ⅰ-Ⅳ』、春秋社、1949-59 年、伊原吉之助訳「功利主義論」、関嘉彦編『ベンサム　J・S ミル』、中央公論社、1979 年、早坂忠訳「自由論」、関嘉彦編『ベンサム　J・S ミル』、中央公論社、1979 年、山下重一訳『評伝ミル自伝』、御茶ノ水書房、2003 年、小泉仰『ミルの世界』、講談社、1988 年。

1　Brink, D.O., Mill's deliberative utilitarianism, *Philosophy and Public Affairs* 21, 1992, pp.67-103, Sosa, E., Mill's utilitarianism, Smith, J.M. ed., *Mill's Utilitarianism: Text and Criticism*, Belmont, Wadsworth Publishing Company, 1969,154-72, Edwards, R.B., *Pleasures and Pains: A Theory of Qualitative Hedonism*, Ithaca and London, Cornell University Press, 1979, Feldman, F., *Pleasure and the Good Life*, Oxford, Clarendon Press, 2004. とくにブリンクの解釈については、水野俊誠「J.S.ミルにおける異質な快楽の優劣に関する一考察」『エティカ』1, 2008 年、85-102 頁を参照。

2　またミルは次のように述べている。「ところで両方を等しく知り、等しく感得し享受できる人々が、自分の持っている高次能力（higher faculties）を使うような生き方をはっきりと選び取ることは疑いのない事実である」（CW10, 211）。

3　ただし、すべての感情が高次能力に該当するとミルが考えていたのかどうかについては、疑問の余地がある。

4　Feagin, S., Mill and Edwards on the higher pleasures, *Philosophy* 58, 1983, p.249.

5　Mill J., *Analysis of the Phenomena of the Human Mind*, Vol. 1, 2nd ed., London, Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1869, p.3.

6　Long, R.T., Mill's higher pleasures and choice of character, *Utlitas* 4 (2), 1992, pp.279-97, Skorupski J., The place of utilitarianism in Mill's philosophy, West H.R. ed., *The Blackwell Guide to Mill's Utilitarianism*, Malden, Oxford, and Victoria, Blackwell Publishing Ltd., 2006, pp.45-60, Harris, G.W., Mill's qualitative hedonism, *Southern Journal of Philosophy* 21, 1883, 503-12, Urban W.M., *Fundamentals of Ethics*, New York, Henry Holt and Company, 1930.

7　ロングは次のように述べている。すなわち「高級快楽の優位性は、実際、量的であるが、間接的にのみ量的である。低級快楽より高級快楽を選択するさいに、我々は、事実（*ipso facto*）、低劣な性格より高貴な性格を選択する。そして必要な量的優位性を与えるのは、高級快楽そのものの快さではなく、高貴な性格の快さである」（Long, R.T., Mill's higher pleasures and choice of character, *Utlitas* 4 (2), 1992, p.279）。「低級快楽が高級快楽より量的に上位におかれる場合でさえ、

高級快楽は低級快楽より選好されうる。というのは、高級快楽は低級快楽が連合している生き方を量的に上回る生き方と、ある程度連合しているからである。生き方の量的優位は、高級快楽がそれ自体量的に優れているかどうかにかかわらず、高級快楽の選好を正当化するものである。……愚か者、まぬけ、悪人であることは、単に、個々の機会に愚かにまたは不正直に振舞うことの問題ではなく、ある人生を通じてそのように整合的に振舞うことの問題でさえない。それはむしろ、ある心理的な特徴と傾向を持つことの問題である。そこで、快楽の間での我々の 1 階（first order）の選択は、性格の間での 2 階（second order）の選択によって決定されると私は述べる。我々はある種の人、すなわち高級快楽を選択する人になることを選択する」（Long, *op.cit*., p.285）。

8　ロングは次のように述べている。「したがって「高級快楽」とは、量的な根拠に基づいてもっとも快い性格を選択した人々によって選択されるものである。

　このような説明は、ミルの「質のテスト」を彼の心理的快楽主義と調和できるようにする。「快楽における質の相違という言葉で私が何を言いたいのか、あるいは、量が多いということによらずに、単に快楽として、一方の快楽をもう一方の快楽より価値があるものにするのは何かと尋ねられたら、可能な答は 1 つしかない。2 つの快楽のうち、両方を経験したすべての人またはほとんどすべての人が、一方の快楽を選好すべきだという道徳的責務のどのような感情とも関係なく、決然と選好する快楽があるとすれば、それがいっそう望ましい快楽である」。（動機の強さは、「欲された物事の、我々が考える快さ、または避けられた物事の、我々が考える苦痛に比例するので」）意志が最も強い動機に常に従う、というミルの主張を考慮すれば、人々の選好は究極的には（*ultimately*）快楽の量に基づいて説明されなければならない。そこで、経験豊かな判定者が高級快楽を直接望ましいものと見なすという理由だけ（*merely*）で高級快楽を選択する場合、高級快楽は、ミルの考え方に反して（*contra*）、いっそう多い量の快楽を含まなければならない。しかし、高級快楽に対する判定者の選好が、（量的に優れた）性格（*character*）への彼らの選好に基づいて説明されるとすれば、高級快楽の選択は、性格の量的な選択に基づいて究極的に説明される限り、それ自体量的である必要はない」（Long, *op.cit*., p.286）。

9　水野俊誠「快楽の質に関する J.S.ミルの見解について」『エティカ』2, 2009 年、23-42 頁を参照。

10　また、はじめに愚か者の性格や生き方よりソクラテスの性格や生き方が選択されるということは現実には起こらない。したがって、はじめに快楽を最大化する生き方ないし性格が選択され、その性格に対応する個々の快楽が選好されるというロングの解釈は現実に適合していない。このような解釈をミルに帰すこ

とは、ミルの見解によけいな問題点を持たせることになる。

11　スカルプスキーはこのような解釈をとっている（Skorupski, *op.cit.*, p.56）。

12　水野俊誠、前掲書、2008 年。